

『イエメンを知るための63章』
佐藤寛*・馬場多聞** 編著、明石書店、2025年

松尾 昌樹†

「知るため」シリーズにイエメンが含まれたことは、いくつかの点でニュースであろう。一つは、望まれていたイエメンがようやく含まれるようになったという、渇きがいやされるという意味でのニュースである。「知るため」シリーズは学術書ではなく、同書がテーマとする国や地域に強い関心を持ち、そこに行ってみたい、知りたい、と思う人々のために平易に情報を提供する媒体である。あるいは、かつてそこを訪れた感動をもう一度味わいたいと思う人々が手に取るシリーズでもあるだろう。このシリーズは、観光地や留学先としてよく知られているヨーロッパ諸国や先進国だけでなく、多様な途上国も扱っている。その中には、果たして日本に、あるいは国際的に、その国がどのように重要なのか素人目には分かりにくく、それゆえ類書で取り上げられる機会の少ない国も含まれている。このため、「知るため」シリーズには一定のファン層が存在すると思われる。こうしたファンにとって、本書は待望の一冊であるに違いない。

本書を手にする人々の中には、本書を待ち望んだイエメンを愛してやまない人が含まれており、彼らが「そうそう、そうなんだよな」という共感を持ちつつ読み進める姿が目につく。イエメンは中東でも経済社会開発が遅れた国に分類され、その背後には紛争が横たわっていることは周知の事実である。紛争とその被害には強い憤りを覚えつつ、低開発国に見られる無秩序や不合理もまた、ある種の魅力となって人々を惹きつける。そうしたイエメンの多面的な魅力を存分に堪能できるのが、本書の魅力の一つであろう。とりわけ、本書の第4部「社会構造」で展開される被差別層への眼差し（第25章「アフダームあるいはムハンマシーン」）や、山岳地帯の特徴が表れる経済活動（第28章「曜日市」）、また第5部「生活を取り囲むもの」で叙述される生活感あふれる衣食住の様子は、色彩豊かにイエメンの魅力を届けてくれる。また、本書を業務や学習の手引きとして手に取る人も多いはずである。ビジネスでイエメンと取引を行う人、あるいはこれからイエメンでの援助活動に携わるために本書を手にとる人も多いだろう。そうした読者にとって、第1部「内戦のリアリティ」、第3部「歴史と誇り」、第6部「産業となりわい」は、イエメンを初めて知る人々にとって、まさに手引きとなる貴重な生きた情報であふれている。

本書の魅力は、そのすべてが貴重であるという点に尽きる。ここで貴重とは、各章の筆者の体験に

* アジア経済研究所 名誉研究員

** 立命館大学文学部 教授

† 宇都宮大学国際学部 教授

matsuom@a.utsunomiya-u.ac.jp

裏付けられた、他に流通していない情報が持つ価値を指している。生成 AI がそれらしい文章を作り出す今日、書籍という媒体で情報を提供することの意味は大きくゆらいでいる。簡単に言えば、すでに多くの人が知っている可能性のある情報を、わざわざ書籍という媒体で公開する必要性は、あまり高くない。情報を欲する多くの人々は、その情報が正確かどうか、誰が書いたものなのかという正確性や信憑性よりも、はやく、手軽に入手できる情報に価値を見出す。ただし、生成 AI はすでに流通している情報から学習して文章を生成するという特性を持つため、あまり広く流通していない、つまり大多数の人が欲しているわけではない情報については、抽象的で面白みのない文章しか生成できない。例えば、上記でも紹介した「曜日市」について ChatGPT5.4 に尋ねると、1000 字程度の説明の末尾に以下のようにまとめてくれる。「曜日ごとに開かれる農村・部族社会の定期市場であり、経済・交通・社交・政治秩序を同時に支える地域制度です」（2026 年 3 月、ChatGPT5.4Thinking を使用）。経済活動としての市が曜日ごとに各地域で開催され、それが部族的特徴の強いイエメンを舞台に観察されるのであれば、上記のような回答になるだろう。概ね間違いではないこの文章を 37 秒で作る能力は素晴らしいが、本書で展開される山岳地帯に住むイエメン人の「安全」や「名誉」、「庇護」の概念に基づく説明には程遠い。

ここで、人が書いた文章には AI にはない温かみがあるとか、AI には感情がないとか、そういったことを主張したいのではない。現地に住み、現地の人々と共に働く人は、イエメン人のちょっとした仕草や言葉の背後にイエメンの社会や歴史に基づく膨大な情報を瞬時に読み解く。イエメンの人々が山岳地帯に居住しているのは、そこが「安全」だからだ、という解釈は、現地の社会構造や歴史を理解せずには生まれない。さまざまな情報が、各章の著者の体験を踏まえて現地の文脈と共に記述されることで、言葉の一つ一つに、イエメンに固有の多様な概念や文化が込められる。我々はそうした情報に触れることで「イエメンを知る」のだ。

本書が出版されたことがニュースであることのもう一つの点は、これまでイエメンがこのシリーズに含まれていなかったことにある。本書の扉に記された「エリア・スタディーズ 215」の記述は、本書がシリーズの 215 冊目ということを示している。イエメンであれば、もっと早く出版されていてもおかしくない、というのは大方の人々の感想であろう。なぜ 2025 年に出版されることになったのか、そこにはさまざまな事情があると思われる。本書の「はじめに」を拝読すると、おそらくは「紛争国家」「破綻国家」としてのイエメン、という位置付けを避けたかったという編者の意図が存在したようである。「本書は決して紛争の解説書ではない」「本来の平和なイエメンの姿を読者に提示したい」という編者のメッセージには、現代中東政治研究に関わる評者でなくとも、多くの方が同意されるのではなかろうか。

現代中東政治に関わる人々は、不可避免的に紛争や貧困、圧政、差別といった深刻な問題を取り扱うことになり、またそうしたテーマは広く読者の関心に応えてしまう。中東がいつまでも紛争研究の舞台として、民主主義の成功と失敗の実験場として扱われ、この地域が奇妙で残酷な世界という役回りを期待通りに演じてしまうことに、現代中東に関わる人々の多くは不安と危惧を抱いている。イエメンを知ることが難しいから出版が遅れたのではない。イエメンを伝えることの困難さが、215 巻という番号に表れているのであろう。

評者が願うのは、本書の改訂版が着実に出版されることである。出版されて間もない時期にこのように希望を述べるのは、少々早いかもしれない。しかし、イエメンの紛争が長引けば、それだけ現地経験を持つ人々が少なくなる。イエメンに限らず、日本から遠く情報に乏しい国を訪問し、生活し、

学ぶ人々は、自ずと先達に頼ることになる。イエメンに関わる多くの人々は、先達に連れられてスーク（市場）の歩き方から部族民と交渉する術まで、多くを学んだであろうし、その知識と経験を次の世代に引き継ぐことで、「イエメンを知る」技が継承されてきたのだと思われる。本書は、そうした技を共有している集団によって生み出された成果である。しかし、この技を持つ人々の血の滲むような努力があったとしても、一度人々が現地に滞在できなくなれば、技の継承は途絶えてしまうかもしれない。イエメンに関わる人々が数十年にわたって紡いできた糸が、今後も10年、20年と続くだろうか。これは第一に、イエメンの平和にかかっており、本書でも繰り返し述べられる難しい課題である。ここで我々にできることは、本書を手にとってイエメンへの関心を持ち、「イエメンを学ぶ」技を自ら継承してゆくことなのかもしれない。